

法王G7サミットに初参加

法王フランチェスコは6月14日、イタリア首相ジョルジャ・メローニの招待を受けて、イタリアのプリア州ボルゴ・エンヤツィアで開かれたG7サミットに出席した。というのも、今回のサミットにはG7の首脳に加え、ヨーロッパ、インド、アメリカ、サウジアラビア、アラビアの代表者が来訪し、AI関連の会議に出席するからだ。AIをめぐる倫理的問題については、イタリアとヴァチカンは同じ意見を持っている。その中心となって理論的仲介をしているのが、法王庁立グレゴリアン大学の教授で、神父のパオロ・ベナンティ氏である。

法王は6月14日早朝、ヴァチカンに100名以上の世界の喜劇役者を迎え、特別謁見をした。「皆様方は日々人を笑わせ、喜ばせている。神をも笑わせてほしい」と訴えた。「神も笑うのですか?」という記者の問いに「もちろんだとも。神は愛している者と冗談が言えることを望んでいるのだからね」との言葉を残した。そして法王はただちにその場を辞して、ヘリコプターに乗り込み、G7の開催地へと飛んだ。

こうしてローマ法王の初めてのG7参加が行われた。「これは歴史的瞬間です。AIは魅力的であるが、同時に恐ろしい問題をはらんでいる。それは、まさしく聖なる正しさを持って扱うべき問題です。AIのみならず、いかなる機械も人間の命を奪ってはならない。」法王は近年、新しい大戦が起こることを心配しており、「話し合いによる平和は、終局のない戦争よりはるかに良いものです」と述べた。

アメリカのバイデン大統領は今年11月には満82歳になるが、法王も12月には満88歳となる。G7参加者の中で法王は最も高齢者になるのだ。法王はG7の首脳はじめ参加各国の代表団と挨拶を交わした。ウクライナのゼレンスキー大統領に対しては、「神はあなたを祝福している。しかし、ロシア国内を攻撃するためにNATOの武器を使ってはいけません。戦争のエスカレーションを避けるべきです」と述べた。ゼレンスキー大統領は、「戦争終結のために、パロリン枢機卿を派遣していただき、また平和の使者として、イタリア枢機卿代表団長のズッピ氏を派遣していただき、ロシアに連れ去られた388人の子供がウクライナに返還されるように尽力して下されたことを感謝します」と、法王に応じた。

この日は精力的に動いた1日だった。法王は朝7時55分より特別謁見をこなし、正午ごろG7の会場に着き、諸会議に出席した。全てが終了したのが午後8時45分。予定より1時間遅れて、ヴァチカンに戻るヘリコプターに乗った。メローニ首相は法王に対して、その労をねぎらった。法王は「私はまだ生きてますよ」と応じたが、首相は「私も生きていますよ」と答えて、二人して微笑んだ。

第1回世界子どもの日

5月25日、26日の両日、第1回「世界子どもの日」集會に、世界の101カ国から5万人以上の子供たちが保護者と共に、ローマのオリンピック競技場に集まった。この集會には、法王をはじめとして、イタリア大統領及び首相、歌手のレナート・ゼーロ、元サッカー選手のブッフォン、喜劇役者のバン

フィヤベニンニも参加した。この集會では、ウクライナのハルキウから参加した子供が「爆弾の恐怖」を話し、ベツレヘムから来た子供は「城壁が隔てるもの」について話した。またロマの子供は、「どのようにしたら、世界の子を愛せるか」と問いかけ、ニカラグアから参加した子供は「家もなく、仕事もない人たちはどうやって生きていくのですか」と尋ねた。法王は会場の皆に向かって「すべてを解決するために、共に祈りましょう」と訴えた。「無実なのに痛みがあるということに答えはありません。ただ、祈るしかないのです」。

法王は、戦地から30名ばかりの子供たちを招待していた。その中には、戦争で障害を負った子供や親を失った子供たちもいた。その中の一人が「平和を作るのは可能でしょうか?」と尋ねたところ、法王は「できるとも。平和は常に可能です。あなたがたは素晴らしい世界を作ることができるのですよ」と答えた。

2日目の会場はヴァチカンのサン・ピエトロ広場だった。当日の主演はイタリア喜劇界の第一人者ベニンニだ。会場は彼の独壇場だった。5万人の子供たちは大いに笑い、大いに楽しんだ。その後、法王の話の神妙に聞き入ったのである。「福音と言われるのは、人を癒し、痛みを共にすることです。最高のことは、人を思いやることです。今の世界は、慈悲とか愛とかを知らない人が治めているのです。子供たちなら、戦争ごっこをして遊んでいても、誰かが一人でもケガをすれば、すぐに戦争ごっこを止めるのに、大人たちは多くの人々が傷ついても決して戦争をやめない。それは、戦争を止める言葉を知らないからなのです。あなたがたの中から、いつかその魔法の言葉を発見する者が出てきますように」。次回の「世界子どもの日」は、2026年9月に開催することが決定した。

カソリック界に異端の動き

カルロ・マリア・ヴィガノー神父は1941年1月16日イタリア北部のヴァレーゼに生まれた。1992年から1998年までナイジェリアのヴァチカン大使、2011年から2016年までアメリカ合衆国のヴァチカン大使となった。8年前の2016年に75歳となり、定年退職した。だが、ヴィガノーはその直後から、聖ピエトロの座につくものを攻撃し始めた。彼は反法王フランチェスコ派の急先鋒に立つようになり、2018年8月には法王に対して、辞任するように迫った。彼はまた、現法王のコンクラベ選挙の非合法性を訴えるとともに、第二ヴァチカン公会議を受け入れることができないと宣言した。宗教者の世界会議は悪しきイデオロギーに汚染されており、法王フランチェスコが指導する典礼はガンの転移したものであるとさえ述べた。彼は、半世紀前に異端的行動を取ったフランスのマルセル・レフェーブ大司教を引き合いに出し、レフェーブの擁護は自分の責務であると述べ、現法王は歴代の法王に反し、またキリストの教会に反するものであると断じた。これは明らかに異端的言動であり、ヴァチカンではヴィガノーの動向を注視して警戒している。